「いのちの教育」：臓器提供を「訓育」する装置？
―カズオ・イシグロ『わたしを離さないで』を「豚のＰちゃん」の教育実践とともに読み解く―

大谷　いづみ*

15歳未満を含む家族承諾のみによる臓器提供を可能にした2009年の臓器移植法改定に前後して，子どもへの死生観教育，生命倫理教育が期待される一方，生体移植を主題化した映画やテレビドラマなどが話題を呼んでいる。「命の贈り物」「命のリレー」という脳死・臓器移植推進のスローガンは，食物連鎖や生態系という文脈におくと，屠畜の（疑似）体験によって生命の尊さを学ばせる「いのちの教育」の一部とも連なる。要領よくパッケージ化された知識と体験と感動の「物語」は，知識の再帰性のもと，「移植医療を啓蒙推進」する装置となって作動する。他方，カズオ・イシグロの原作『わたしを離さないで』とその映画化作品は，臓器提供だけを使命として造られ育成されたクローンという架空の設定を用いることで，臓器移植という医療が，人を，生きることを望まれる存在と死ぬこと・犠牲になることを期待される存在とに二分するものであることを浮き彫りにし，提供のために家畜化されたクローンの静かな絶望と諦観が，「人間」の欲望を合理化した社会システムの「非人間性」を逆説的に炙り出す。解体と食用を目的に小学校の担任クラスで子どもたちとともに豚を飼い３年後食肉センターに送って終了した黒田恭史の「豚のＰちゃん」の教育実践は，一見「失敗」にみえながらも，筋書きを超えた子どもの言葉が教師を圧倒するに至った。これら非対称な関係の転覆に，教育の暴力性を超克する教育の希望――さらには生命倫理学の組み替えへの希望を見いだすことができる。

キーワード：いのちの教育，死の教育，生命倫理教育，移植医療の啓発，知識のパッケージ化，知識の再帰性

はじめに

2011年５月３日，本人の意思不明のまま，家族承諾のみによる脳死からの臓器提供がおこなわれた。2009年に改定された臓器移植法が2010年７月17日に完全施行されてからわずか９ヶ月間に43例めである。旧臓器移植法が1997年に成立してから第一例までに１年４ヶ月を要し，その後13年弱の間に86例を算えたのみであったことを考えると格段の増加である。

報道から伺える家族の承諾の動機は判で押したように「せめて臓器だけでも生きていてほしい」という一様なものである。４月12日には，旧法では除外されていた15歳未満の少年からの臓器提供も本人の意思不明のまま家族の承諾によっておこなわれた[1)]。移植推進を願う立場からは「悲願」ともいえる本事例は，移植ネット

＊立命館大学産業社会学部教授

ワークによって数度にわたる記者会見がなされ，臓器移送の様子や家族が添えた千羽鶴の映像が新聞やTVを飾った。これらの報道からは「臓器移植をめぐる物語」が急速に書き換えられようとしていることがうかがえる。

ところで，改定臓器移植法では，その17条の二に，「移植医療に関する啓発等」として「国及び地方公共団体は，国民があらゆる機会を通じて移植医療に対する理解を深めることができるよう，移植術に使用されるための臓器を死亡した後に提供する意思の有無を運転免許証及び医療保険の被保険者証等に記載することができることとする等，移植医療に関する啓発及び知識の普及に必要な施策を講ずるものとする」ことが定められており，同法に従って，健康保険証や運転免許証に臓器に関する提供意思表示欄が設けられたことは多くの人の目にするところである。

臓器移植法改定の論議にあたっては，その焦点のひとつが旧法では除外されていた15歳未満の脳死下での臓器提供にあてられていたことから，子どもの意見表明権を保障するためにも[2]，成年未成年にかかわらず，日頃から家族で話し合っておくことの必要性が強調されるようになっている。こういった状況は，「いのちの教育」や「生命倫理教育」の形を借りて脳死や臓器移植が教室の場で主題化され，中等教育のみならず，初等教育の場においてもその実践が促進されていくであろうことを予想させる。

他方，2009年の同法改定をめぐる国会論議と2010年の改定法完全実施に前後して，臓器移植を主題にした映画やテレビドラマ，漫画が間断なく発表されている。2002年に刊行された梁石日の小説『闇の子供たち』[3] の中心は臓器密売というよりもむしろタイの人身売買，児童ポルノと児童売買春だったが，2008年に制作・上映された映画では，臓器密売により大きく焦点があてられていた。臓器移植法改定の2009年には，姉を救うために遺伝子操作されて生まれてきた妹[4] がこれ以上の姉への組織や臓器の提供を拒否すべく両親を相手に訴訟を起こす「私の中のあなた」が上映され，ジョディ・ピコーの原作とは真逆のラストが話題になった。施行の年，2010年には，親族間の臓器提供を密約して偽装結婚する「流れ星」[5] が放映された。この間，2007年から2010年にかけて，佐藤秀峰の『新ブラックジャックによろしく・移植編』が４年にわたって連載されていた。そして2011年春，それらの作品群とは一線を画する設定の物語として上映されたのが，英国最高峰の文学賞であるブッカー賞受賞作家であるカズオ・イシグロの2005年の話題作を映画化した「私を離さないで」[6] である。

ところで，欧州委員会の2006年秋のアンケート調査 Europeans and organ donation では，家族と臓器移植等について議論したことがある者の中では，77％が自らの臓器を死後に提供する意思があるが，議論をしたことがない者については，提供意思がある者は42％となっており，この結果から，議論の活発化が推奨されているという（岩波，2009：51）。これには臓器提供を議論する家庭の価値観や背景など，より精緻な分析を必要とするが，欧州委員会は議論そのものが臓器提供を促進することになると受けとめているようである。改定臓器移植法を受けて日本の学校教育でも取り組まれるであろう脳死・臓器移植の授業も，こういった背景のなかにあると考えてよい。

では，家庭で学校で議論するに当たって用いられる情報はどこでどのような立場で発信され

たものなのか，その情報はどういう文脈で語られどのように受けとめられるのか，新聞やテレビニュースは，あるいはその物語性と娯楽性のゆえに，時には新聞やテレビニュース以上に「啓発」の役割を大衆に果たすことになるかもしれない映画やドラマなどのエンタティメントは，「臓器移植をめぐる物語」を，どのように描いているだろうか。

本稿では，まず，近年日本で上映・発表された「臓器移植」を主題にした作品群を概観する。次に，カズオ・イシグロの小説『わたしを離さないで』とその映画化作品と，解体と食用を目的に豚を飼い３年後食肉センターに送って終了した小学校の教育実践「豚のＰちゃん」を解析し，最後に，これらの作業を通して，臓器移植という医療技術が「学校」という言説空間（それは，隠れたカリキュラムが規律・訓練によって身体化される「啓蒙」の場でもある）で「いのちの教育」を冠して物語られることの含意を明らかにし，その組み替えを展望する。

１．生体移植をめぐる物語群

ここ数年間に発表された先述の作品群に共通しているのは，臓器移植法が主に脳死からの臓器移植を射程に入れたものであるのに対して，いずれも，生体からの臓器移植が主題化されている点である。他の作品とは一線を画した設定をもつ「私を離さないで」は別として，「闇の子供たち」は臓器密売と移植ツーリズム，「流れ星」は臓器提供を密約した偽装結婚，「私の中のあなた」はドナー・ベビーの臓器や組織の提供拒否（をめぐる親との確執），『新ブラックジャックによろしく・移植編』は他人からの臓器提供という，いずれも生体移植をめぐる喫緊かつ最先端のテーマを描いている。

日本では，臓器移植問題は「脳死は人の死か」という問いに代表されるような「死の定義」の問題として国民的論議の対象となってきた。それゆえ，脳死からの提供が進まないがゆえの現象と説明されてきた生体肝移植のみならず，心停止下の移植が可能な腎移植においても，移植手術の多くが生体からの摘出によって実行されていることは，さほど知られていないのが実情である。

こういった状況は，提供条件の厳しい旧臓器移植法下で脳死からの臓器提供が進まなかった日本に特異なことのように思われがちだが，実際はそうではない。臓器移植においては自給自足に近い状態を保ち，移植大国として知られてきたアメリカにおいても，近年は，移植希望者数の伸びがドナー数の伸びを上回る状況が続き，生体ドナーの占める割合が増加するなど，臓器不足は深刻化している（岩波，2009：45）。実際，OPTN（Organ Procurement and Transplantation Network）の統計によれば，近年のアメリカでの腎臓移植と肝臓移植の４割強が生体移植によるものである[7)]。それは，年齢制限を撤廃し，本人と家族の承諾を要する厳しい条件から家族のみの承諾で可とする改定臓器移植法によって，あたかも臓器不足の解消へと大きく歩をすすめたかのようなイメージが幻想に過ぎないことを物語っている。

こうしてみると，生体移植には一切触れなかった今般の臓器移植法の改定に前後して，国内外のメディア作品において揃って生体移植が主題化されたことは，移植医療の現状に即したものと見ることもできる。そして，先述した作品群が感動的なカタルシスをともなったエンタテイメントであるがゆえに，作品の送るメッセー

ジが大衆に対するまたとない「移植医療に関する啓発」の機会となるであろうことは想像に難くない。

とはいえ，そのエンタテイメント性のゆえに，作品群が「臓器移植をめぐる物語」をどのように伝えているかは十二分に吟味されてしかるべきである。たとえば，「流れ星」では主人公が臓器売買を目的とした偽装結婚を行う。それが仮にキャッチコピーの如く「偽りの愛から，真実の愛へ」変化したとしても行為自体が法が禁じた臓器売買であることは間違いない。レシピエントの兄や母の何かにつけて金で解決しようとするふるまいが，「ドナーを確保して妹を救う」という一点において許容されるかのように描写されていることも気にかかるところである。移植手術がひとたび「成功」すればレシピエントはただちに健康をとりもどしそれがずっと続くかのようなおきまりの「イメージ」[8]，生体での肝臓提供を「たいした手術ではない」と繰り返している点もオーディエンスに誤った情報を与えている。

「私の中のあなた」では，ドナー・ベビー作成の是非，未成年であるとはいえ，本人の承諾もなく乳幼児のときから親の意向で姉のために臓器や組織の提供を強いられることの是非など，生命倫理学上の論点がいくつも主題化されていたにもかかわらず，すべてが「家族愛」のもとに大団円で閉じられた。「流れ星」や「私の中のあなた」に比べると，移植した腎臓がレシピエントに生着せず人工透析に戻っているという『新ブラックジャックによろしく・移植編』の設定は，移植医療の「実態」に切り込んだ珍しい作品といえる。とはいえ，主人公がレシピエントを助けたい一心で他人への生体腎ドナーとなることで，本作品もまた「「大切な人のいのちを救うため」ならば，人はいつも自らの危険や犠牲を顧みずドナーになること／臓器確保に奔走することを選ぶものだ」というイデオロギーをオーディエンスに注入するパターンを踏襲することになった。

これに対して，「闇の子供たち」はその救いのなさが「移植医療に関する啓発」を果たした。何しろ，公開の年の５月２日に，国際移植学会によって「臓器取引と移植ツーリズムに関するイスタンブール宣言」が出され，国境を越えてアジアや東欧を舞台に繰り広げられる不正な臓器取引が批判された直後の公開である。親によって売春宿に売られた幼児から生きたまま心臓摘出するというショッキングな設定の非倫理性は「では息子に死ねというのか」という言葉を移植待機児の母親に吐かせることで封じ込められ，父親の「石油じゃないんだ。よその国に頼るなんてオレだってしたくなかった」というセリフで中和されて国際問題に落とし込まれる。ここでは他者の健康や死という，「犠牲」を前提とする移植医療の問題性は不問に付されたまま，「移植後進国」日本の臓器提供促進啓発に回収されていくのである[9]。

このように，現在流通している「臓器移植をめぐる物語」は，たいていは他者のための自己犠牲を厭わない愛と善意の物語（それは「大切な人」を救うために奔走する家族，患者のために英雄的な努力を払う移植医，不特定多数のために善意の贈与をおこなうドナーや家族，家族の負担を慮って移植を拒否し死を覚悟する患者本人の姿として描かれる）に収斂していて，金か野心の亡者のように描かれる闇ブローカーや医師はこれらの「愛と善意」を際立たせるための道具だてに過ぎない。この構図の中では，悪玉の不正を告発する「正義」だけでなく，臓器

確保のためならば犯罪さえ厭わない患者家族の歪みを指摘することさえ，家族の「愛と善意」を踏みにじる悪しき行為として再配置される。「闇の子供たち」において日本人の移植待機児の親が宮崎あおい扮するNPO職員音羽によって詰問されるシーンにネット上で批判の声が上がったのは，演者の力の入った演技が過度に感情的な印象を与えてしまったことを割り引いても，上記のような構造があるからである。

2．ドナーたちの諦念

さて，『私を離さないで』は，上記の作品群とは一線を画していると繰り返してきた。臓器提供のためだけに造られ育成されたクローン人間（作中では「コピー」と呼ばれる）がその「使命」を果たして「終了」していくという架空の設定だからである。しかしながら，時代をあえて1970年代から1990年代としたこと，カズオ・イシグロのいつもながらの抑制の利いた筆致，成瀬巳喜男に倣ったという抑えた色調の映像が，SF臭を退けてあたかもそれが事実であるかのような錯覚を起こさせることに成功している。もちろん，この作品がリアリティをもつのはそのような表現上の技巧によるだけではなく，設定を含めた「物語」そのものの力によるものである。

以下，映画「わたしを離さないで」の梗概を記す。

画期的な医療技術により人類の平均寿命が100歳を超えた時代は1994年，28歳の介護士キャリーは，これで「終了」するであろう一人の若者の臓器摘出手術をみまもりながら，少女時代を過ごした寄宿学校ヘールシャムでの日々を思い起こす。そこは校長のミス・エミリー以下数名の教師（原作では「保護官」となっている），健康診断をおこなう医師・看護師や出入りの業者，「ギャラリー」に展示する絵画や詩を選ぶために時折来校する「マダム」と呼ばれる女性の他は完全に外界から遮断された世界であった。外界から持ち込まれるわずかな娯楽品は古着や壊れた玩具や手足のもげた人形などみすぼらしいことこの上ない品々だが，生まれてこの方ヘールシャムの集団生活しか知らない子どもたちにとってはそんな不良品さえ外界からの空気と「私だけの所有物」を感じさせてくれる数少ない楽しみの機会である。

そんなささやかな楽しみや子ども同士の諍いとともに，キャリーと癇癪持ちの少年トミー，女子グループのリーダー格ルースの3人の友情と恋愛が描かれる。映画評や書評でさえも慎重に秘された本作品の設定は，原作でも映画でも，実のところ早々に，ヘールシャムの方針に疑問を持つルーシー先生の口から明かされる。「あなたたち「コピー」の未来は決まっている。臓器を提供して終えるまでの短い時間。だから，自分を知ることで生に意味を持たせて」と。

だが，そんな過酷な運命を知っても，子どもたちは不思議なことに誰一人泣くことも叫ぶこともしない。小説では，トミーがその不可思議さをルーシー先生の「あたなたたちは教わっているようで教わっていない」という言葉とともに，次のように説明する。

> 何をいつ教えるかって，全部計算されてたんじゃないかな。保護官がさ，ヘールシャムでのおれたちの成長をじっと見てて，何か新しいことを教えるときは，ほんとに理解できるようになる少し前に教えるんだよ。だから，当然，理解はできないんだけど，できないなりに少しは頭に残るだろ？

その連続でさ，きっと，おれたちの頭には，自分でもよく考えてみたことのない情報がいっぱい詰まってたんだよ。

（Ishiguro 2005: 82＝2006: 100）

真実は子どもたちに理解できないなりに既に十分な情報は周到に与えられている――トミーがヘールシャムについて語るこの言葉は本作品の重要なモチーフであると同時に，大人（社会）が子どもにいつ何をどのように教え語るかを意味してもいて，ことヘールシャムに限ることではない。この点は後にあらためてとりあげよう。

学校を終え，いまや自分たちの運命を明確に知るコピーたちが成人して提供が始まるまでの期間を過ごす「コテージ」での生活はひどく質素ではあるがつかの間の自由な日々でもある。車の運転を習って街への外出を楽しみさえする。だが，外界から「遮断」されている基本はそれほど変わらない。彼らの立ち居振る舞いはテレビからうかがい知ったそれを模倣したものである。街のカフェでの注文はいくらヘールシャムの授業で習ってはいてもぎこちないことこの上ない。ヘールシャム時代にカップルとなったトミーとルース，トミーとの絆を感じながらも二人と友人関係を保つキャシー。３人の微妙なバランスが傾いたころ，キャシーは「介護士」となるべく独りでコテージを離れる。

提供者を宥めて順調に回復させる優秀な介護士となったキャシーは，やがて提供用医療センターで偶然ルースと再会し，それがきっかけでトミーとの再会も果たす。ルースは「取り残されるのが怖くてトミーに言い寄り二人の絆を引き裂いた。罪滅ぼしにマダムの住所を教えるから「真実の愛」を証明して提供猶予を申し出ろ」と言い遺して「終了」する。ヘールシャムには，真実の愛を証明できるカップルには数年の提供猶予が与えられるという噂があり，ルースはその手がかりを二人に遺したのだ。

「マダム」の元を訪れて提供猶予をねがい出たキャシーとトミーを迎えたのはヘールシャムの校長だったミス・エミリーであった。彼女は二人にこう告げる。私たちが証明しようとしたのは（コピーの）魂（が猶予に価するかどうか）を探るためでなく，（コピーに人間の）魂があるかを知るため。でも，そんな証明は誰も求めていなかった。ただ臓器が必要なのであって「コピー」の生になど興味はない。ヘールシャムが閉鎖されたあとはブロイラーの養鶏場のような学校ばかりになったと。

閉鎖の理由は映画では言及されないが，小説では能力を増強した子ども（エンハンスメントである！）を造って望む親に提供しようとした企ての発覚がきっかけだったと詳述されている。人間より優れた存在の登場を怖れた人々は，「コピー」に臓器以上の何であることの価値も認めず，ヘールシャムの企て以前の日陰の存在に戻ってほしかったのだと。

そんな残酷な「真実」を告げられて，キャシーもトミーも抗議の声一つあげず，つつましく「マダム」の家を辞す。ヘールシャムでルーシー先生から「真実」を告げられたときと同様に。それでも，帰途，田舎道で車を止めてやり場のない絶望の咆哮を繰り返すトミーを，キャシーは幼児をあやすように抱きしめ慰める。

――

「わたしを離さないで」が他の作品群と異彩を放っているのは，臓器提供のためだけに造られたクローン人間という設定を借りることで，「臓器移植をめぐる物語」を徹底的にドナーの立場から，しかもドナーとなることから免れる

ことのできない出口なしのドナーの過酷な「現実」を，リアリスティックに描出しているからである[10]。「提供」すなわち臓器の摘出がおこなわれた瞬間に「終了」してこと切れ，手術台に放置されるルースの遺体。臓器提供でトミーの身体に刻まれた生々しい巨大な傷跡。提供によってドナーが次第にその健康をむしばまれていく「現実」。これらはこれまでの映画やドラマでほとんど描かれることのなかったシーンである。否，臓器移植に関する報道においても言及されることは稀であった。そして，ドナーとなることから逃れられない「コピー」たちの葛藤と静かな諦念は，クローンというSFじみた設定を除けば，家族間生体移植でドナーとなることを余儀なくされていく親子・夫婦のそれにも通じる[11]。

「わたしを離さないで」を観れば（読めば），ドナーとなること，ドナーを免れ得ない「コピー」たちの残酷な運命にオーディエンスは心動かさずにはいられない。他方，作品に登場する「オリジナル」たちは，彼らに同情の一端を垣間見せこそすれ提供の使命を果たして「終了して（＝殺されて）」いくことに何の疑問も持たない。あたかも「コピー」は何の感情も持たないかのように。――そう，「人間」＝「オリジナル」は，「コピー」が人間である証明など求めていないのだ。

ヘールシャムはまずは体育や規律正しい生活と頻繁な健康診断で健康な身体を育成する場であった。魂を磨くために詩や美術や造型に没頭することが重視されてはいたが，将来に何が待ち受けているか，その意味するところは慎重に隠されていた。心身の健全たるを訓育され，周到に保護された子ども時代――誰からも奪い去られることのない何かを与えられる――を保障することで，コピーもまた人間のように魂を持ちうることを証明しようとしたのである。

だが，それは失敗に終わった。「コピー」に魂がなかったからではない。人々がそんな証明は求めていなかったからである。「癌とか神経疾患で苦しみたいか？　答えはノー」ミス・エミリーの簡潔な問いと答えが全てを物語る。「わたしたち」が病で苦しまないためには臓器確保のための「コピー」が存在しなくてはならない。しかし「コピー」は「コピー」。彼／彼女（「コピー」）たちに感情も魂もいらない。「コピー」は感情も魂もない存在でなければならない。だから，ヘールシャムや「コテージ」に出入りする「外」の人々は，「コピー」たちと「手続き」を媒介とした無機質な接触しかしない。ヘールシャムを時折り訪れる「マダム」はまるで怖れているかのように「コピー」たちと距離を取る。

「コピー（クローン）」を「脳死者」あるいは「長期脳死児／者」と入れ替えてみると，「コピー」と「オリジナル」の関係が「脳死者」と「移植待機者」の関係に酷似していることに気づく。レシピエントがドナーへの感謝を忘れているというわけではない。臓器がドナーからの「命の贈り物」であることは，ドナーへの感謝の言葉とともに繰り返し語られてきた。

だが，脳死と臓器移植という医療が成立するためには，脳死者は死体でなければならない。脳死者が「生」の徴候を有していてはならない（脳死者が生者である証拠など誰も求めていない）。だから，ラザロ徴候は「単なる脊髄反射」に過ぎない。「脳死体」にメスを入れたとたんに激しい血圧上昇と頻脈が起こりやがて手足をばたつかせるのも「単なる脊髄反射」に過ぎない。それを押さえるために摘出前に筋弛緩剤や麻酔薬を投入するのもばたつく手足を押さえる

手間を省く便宜的な処置にすぎない。だから長期脳死児／者は臨床的脳死であって法的脳死の判定を受けていなかったのだ。万が一そんなことがあったとしたら，それは脳死判定が間違っていたのだ…。――それは苦しい言い訳のようにも思われるのだが，こういった「事実」が「臓器移植をめぐる物語」において語られることは，2009年の臓器移植法改定の国会審議とその報道においてさえ稀であった[12)]。

提供猶予が儚い夢であることを思い知った後，画面は冒頭のシーンに戻る。おそらくは最後の「提供」となるであろう時，介護士であるキャシーにガラス越しに見守られながら，麻酔薬を打たれて意識薄れゆく手術台のトミーは，さながら摘出前に麻酔薬を打たれる脳死者，さもなくば，刑を執行される死刑囚のようである。であれば，キャシーは執行に立ち会う教誨師だろうか。

だが，この物語がそんな私たちの現実との甘やかな類比を一蹴するのは，有能な介護士であったキャシーもまた，間もなく提供者となることを告げられるからである。教誨師は幾多の死刑囚の執行に立ち会った後も生き続けるだろう。だが，「コピー」には提供して終了するまでの短い生しか許されない。開始まえにつかの間携わる仲間の介護以外の務めもない。原作では，もしかしたらコピーたる自分の複製元かもしれない人間が「ポシブル（possible）と呼ばれる。だが，ルーシー先生が予言したように，「コピー」には人間（＝ポシブル）ならもち得たであろう「もしかな（possible）」未来などないのである。

3．「わたしを離さないで」と「ブタがいた教室」を重ね合わせる

ヘールシャムの「実験」が失敗に終わった後，「コピー」を育成する学校がことごとくブロイラーの養鶏場のようになったという設定は重要なアナロジーである。つまり，「コピー」の魂を存在証明する必要なしと証明されるやいなや，「コピー」は食肉を供するために畜産される家畜と同様の存在になったのである。だからといって「コピー」をないがしろにするわけではない。人は家畜を家畜なりに愛し大切にする。自らの生業の拠り所として。鳥インフルエンザや2010年夏の宮崎の口蹄疫による殺処分や今般の東日本大震災に端を発する一連の強制避難・計画避難で育ててきた家畜を置き去りにせざるを得なくなった畜産農家の苦悩を私たちは目の当たりにしているではないか。だからこそ，私たちは食糧にも感謝する。「いただきます」の言葉とともに。それを子どもたちに教えなければ，とも思い至る。

ここで想起するのは，命を奪うことなしに人は生きることができないという食物連鎖と生態系の過酷な実相を，実際にニワトリや豚の屠畜を通して「いのちの尊さ」を学ばせようとする教育実践である。しばしば「死の教育」「いのちの教育」を冠されるそれには，リセット可能なゲームで育ち，パックになったスーパーの肉や魚しか見たことのない子どもたちの死生観やら生命観はひどくあやしい。実際，そんな子どもたちが平気で「死ね」と口にし，長じて，あっさりと自殺やら無差別殺人やらを引き起こしているではないか。やはり，「死を見つめて生の大切さを知る」ための教育が必要だ――とい

う，いまやほとんどそらんじて続けられるような，耳慣れた言葉が連なる。

ニワトリや豚の屠畜を通して「いのちの尊さ」を学ばせようとするその原型は，1980年代初頭に当時東京の公立小学校教師であった鳥山敏子によって実践された「ニワトリを殺して食べる」授業と「豚をまるごと一頭食べる」授業で，教育関係者を中心に広く注目され，1990年代には，森岡正博や鬼頭秀一ら，生命倫理や環境倫理の研究に携わってきた研究者からも再評価された（森岡，1994，鬼頭，1996）。鳥山の実践それ自体は，国語や家庭科，算数などの各教科や性教育，部落差別問題や原発問題，さらには竹内敏晴の演劇論まで結びつけた広汎な構想の下に展開された実践であり，「ニワトリを殺して食べる」「豚をまるごと一頭食べる」という特異な点のみに焦点化して論じられるものではない。そのダイナミズムは鳥山自身の実践記録『いのちに触れる――生と性と死の授業』（1985）『ブタまるごと一頭食べる』（1988）を通して語り継がれているが，総合的な学習の実施前後にふたたび注目され，やがて屠畜行為のみが切り取られて一人歩きすることになる[13)]。

本稿で取りあげている作品群と同時期，2008年の映画「ブタがいた教室」は，大阪の豊能町立東能勢小学校の教師であった黒田恭史が1990年から1992年にかけておこなった実践記録をまとめた『豚のＰちゃんと32人の小学生 命の授業900日』（2003）を原案に制作・公開されたものである[14)]。映画自体は，妻夫木聡が先生役を演じたことのほか，さほど特筆するほどのこともない凡庸なできばえである。実際の実践記録と映画との間にはかなりの距離があるが，いずれは食べることを目的にして担任教師の発案で飼い始めた子ブタがＰちゃんと名づけられ，瞬く間にクラスのペットになっていったこと，保護者も巻き込んでＰちゃんを食べるか否か，食肉センターに送るか３年生に引き継ぐかでクラスの意見が真っ二つに分かれたこと，最後は先生の決断で食肉センターに送ることが決められ，子ども達がそれを見送って終わった経緯は概ね違わない。

この映画と実践記録を読みながら想起されたのが，臓器移植のドナーである。屠畜と食肉を臓器移植と重ね合わせることには異論があるかもしれない。しかし，「命の贈り物」「命のリレー」というスローガンに代表されるように，現在でこそ臓器提供を贈与論の文脈で解釈する論を目にすることしばしばだが[15)]，臓器移植をカニバリズムの表象で解釈する議論もある[16)]。「脳死」基準の策定にあたって科学的見地から精緻な反論を展開していた立花隆が，「臓器移植は最も現代的な意味での生命のサイクルの輪に入ることである」としてドナー登録したというエピソードも思い出される[17)]。

それゆえ，「わたしを離さないで」が描き出す臓器提供用として造られ育成され（提）供されていくクローンたち，本来は家畜のように畜産されるにもかかわらず，ヘールシャムという実験的な施設で「人間」なみに魂を磨かれたヘールシャムの３人の運命は，Ｐちゃんの運命とそっくり重なる。提供猶予の噂が儚い夢である事実を知った帰途，トミーがあげる咆哮は，食肉センターに送られるのを拒むＰちゃんのそれそのものである。

映画「ブタがいた教室」のクライマックスは，卒業を目前に食肉センターに送るか，３年生に引き継いで飼ってもらうか，Ｐちゃんの処遇をめぐって子どもたちが話し合うシーンだが，その話し合いのなか，子どもたちの口から

以下のような言葉が飛び出す。

「殺すのはただ殺すことだが食べるのは動物の命を受け継ぐこと」

「Ｐちゃんの役目は美味しく食べてもらうこと」

「Ｐちゃんを食べることでＰちゃんは私たちの身体の中で生きている」

「殺すんじゃなくてＰちゃんも私たちと一緒に卒業するって考えよう」

「食べること」を「臓器移植」と読みかえれば見事なほどに「命のリレー」という臓器移植推進のスローガンに重なる。「Ｐちゃんの役目は美味しく食べてもらうこと」という言葉は，「「コピー」の使命は臓器提供を果たして終了すること」に他ならない。「オリジナル」（＝「人間」）は，コピーである臓器提供者たちを憐れみこそすれ魂のある人間とみることはない。

子どもたちの言葉には少なくともＰちゃん自身の視点がひとつもないことを，教職課程以外の学生のかろうじて幾人かは指摘するが，教職専攻の学生の関心はおしなべて，この教育実践が「成功なのか失敗なのか」に集中する。では，この実践を「成功」とみる学生たちは，その何に「成功」を見いだすのか。子どもたちがおとな顔負けの言葉で議論を重ねたことか。Ｐちゃんを思って流した涙か。ではその議論の後に，涙の先に，何が残ったのか。心を込めて「いただきます」と言えるようになったことか。それゆえ生命の尊さを身にしみてわかったことか。あるいは，人間（私）が生きるためには動物（自分より低次の存在）を犠牲にしても「しかたがない」と納得することか。

ここでは，Ｐちゃんは人が生きるための糧（材料）であると同時に，食の（あるいは生の）大切さを学ぶための，どこまでも「材料」にすぎない。人と動物の，授業者とその教材との非対称な関係が再考されることはない。さながら，オリジナルとコピーの，生きることを望まれるレシピエントと死を期待されるドナーの，非対称な関係がけっして転覆することがないように。

４．ヘールシャム＝訓育の装置

ミス・エミリーの言によれば，進歩的なヘールシャムは臓器移植の倫理を証明する最後の実践の場であった。その目的は体育や規律正しい生活と頻繁な健康診断で健康な身体を育成するだけでなく，詩や美術や造型で魂の存在を証明すること，すなわちコピーも人間であることを証明することだった。失敗に終わったのは，そんな証明を誰も求めていなかったからである。だが，ここでひとつの疑問がよぎる。芸術が人間の魂の存在を証明するとして，それが優秀な臓器提供者となることの何と関わるのか。

「私の中のあなた」を見よう。これ以上の臓器提供を拒んでドナー・ベビーたる妹が両親を訴えた法廷で，臓器提供はドナーの生きる楽しみを損なう一方でドナー自身の精神面を高めるメリットがあると証言されるシーンが登場する。それは臓器移植問題の倫理性を検討する生命倫理学上の議論を踏まえたものでもある[18)]。

イシグロは，2006年のインタビューでこう語る。「ヘールシャムは子供時代のメタファー。子供が生きている世界に流れ込む情報を，大人たちはかなり慎重にコントロールできる。子どもたちは外界で起きている多くのことが理解できない。言葉だけを聞いても実際にはそれがどういうことを意味するのかわからない」と（イシグロ，2006：131-132）。

いくつかのインタビューを見る限りでは，大

人によって慎重に外界から保護された子ども時代を，イシグロはある種の郷愁として語っているようである。だが，そのイシグロも，作中で描く「保護」が仮借なき残酷な「保護」であることには自覚的である。

保護は同時に管理でもある。言うまでもなく学校は規律・訓練を訓育する装置である。外界と遮断されたヘールシャムでは，体育とともに美術・詩作・造型が奨励されて心身の健全な育成が行われていただけでなく，彼らの臓器提供者としての使命と運命は慎重に計算されて伝えられてきた。加藤典洋は「その知識は一種のブレインウォッシュ（洗脳）の効果を及ぼし，［……］学校は「巧妙に「教える」ことで，「理解する」ことを抑止している」と指摘する（加藤，2011：158）。

ルーシー先生はヘールシャムの子どもたちに，明確な説明が成されていないこと，知らされてはいても真に理解されていない彼らの仮借なき運命を教えて辞職を余儀なくされた。だが，子どもたちを待つ運命を明確に説明して，ルーシー先生は，子どもたちにその運命に抗うことを期待したのか？　否，彼女が説いたのは「自分を知ることで生に意味を持たせ，みっともなくない，見苦しくない（decent な）人生を送れ」という一点のみである。3 人での再会を果たしたルースは，けなげにもキャシーとトミーにこう問いかける。「私たち役に立ってるってわけよね。」ヘールシャムでも「コテージ」でも介護士となった後も常に本を離さず魂を磨きつづけたキャシーは，まさにルーシー先生の助言を生きている。彼女の介護した「コピー」は「動揺」することなく，提供後の回復も早い。提供猶予の夢が破れたときもそれをただ静かにうけとめトミーを宥め，自らも自覚的に運命を受け入れようというのだから。だとしたら，ヘールシャムは魂の存在を示すことに成功したのである。ミス・エミリーに「破壊工作」と名指されたルーシー先生の行為は，ミス・エミリーのめざすそれとさほど違ってはいない。

では，現実の「臓器移植をめぐる物語」はどうか。日本は2009年の改定臓器移植法で推定同意制へと大きな制度変更を遂げ，「移植医療に関する啓発」が今や遅しと学校教育やメディアを通して啓蒙促進されようとしている。そこで描かれる「物語」は，報道にせよ，エンタテイメントにせよ，臓器移植の「実態」を精確に説明するものではない。一通りの説明はされても，その意味は真に理解されていない。ヘールシャムさながらに。ヘールシャムと異なるのは，「物語」を語る教師やエンタテイメントの作り手がヘールシャムの教師たちのように巧妙な計算を自覚しているわけではなく，自らが自らの言葉を理解せぬまま語っていること，そうとは知らずして自己犠牲の臓器提供を訓育する装置となっている，という点である。

文化人類学者の山崎吾朗は，脳死状態での臓器提供を承諾した家族の聞き取り調査から，家族が脳死について必ずしも正確な知識を持たないまま提供を承諾していくプロセスを詳らかにしたうえで，情報量が増え，複雑さが増し，身動きがとれなくなった私たちの社会では，それを解消するために知識をパッケージ化して受け入れ，そのとたんに中身を容易に忘却してしまうさまと，それを補うかのようにあらかじめ同意して責任を一手に引き受ける決定主体を要請する社会システムの生成を丹念に描き出し，そこに，対象を理解するための行為が同時に対象そのものの形成に関わってしまう知識の再帰性を指摘する（山崎，2008：54）。

第１章で概観したように，世間には，「命のリレー」「命の贈り物」というスローガンさながらのパッケージ化された物語群が流通している。学校教育もその影響を免れ得ない。「クリスマスシーズンの道徳の時間にわが子の臓器を見知らぬ人に贈った親のお話を子どもたちに聞かせた」という小学校教師の無邪気な報告を耳にしたのはもうずいぶん前のことである。そこには長期脳死児とその親への想像力もなければ日進月歩する脳科学への視座もない。

いや，問題意識のある教師であれば，臓器移植を取り巻く社会的背景も視野に入れ，中立のファシリテイターをつとめながらディベイトを行っているに違いない。だが，移植医療に関して日常的に接することのできる情報はジャーナリズムにおいても相当に偏ってパッケージ化されたものであり，その偏ってパッケージ化された知識をもとに脳死・臓器移植を理解し議論することそれ自体が，脳死・臓器移植を啓蒙推進するのである。序章で述べたように，欧州委員会が議論の活発化そのものを臓器提供を促すものとして推奨しているのは，この理由からにほかならない。

ヘールシャムの「破壊工作者」ルーシー先生が「コピー」たちに教えようとしてのは，みっともない，見苦しい最期を迎えぬよう，あくまでディーセントな生をまっとうするよう，その運命と死を受容することである。それは「人間」が犠牲を必要とすることを「コピー」にいかに納得させるか，ということでもある。ルーシー先生の言葉は，いかに潔く死を受容するか，いかに死に逝くものを看取り弔うかという作法の構築に腐心してきた／いる死生観教育の一部のありようにも連なる[19]。

５．浮かび上がるディストピア――それとも

映画の最後は原作にはないキャシーの言葉によって閉じられる。キャシーは自らに，そしてオーディエンスであるわたしたちに問いかける。「私たちと私たちが救った人との間に何の違いが？　皆終了する。生（life）を理解することなく命は尽きるのだ」と。

キャシーの前に広がるノーフォークの荒涼とした風景のあと，エンディングロールの最後でヘールシャムの校歌が流れる。それは，キャシーたち「コピー」が自らの運命をうすうすは知らされながらも理解せぬまま屈託のない無邪気な日々を送っていたヘールシャムの日々である。こうして，ドナーとしての短い生は，主人公３人の友情と愛情が交錯する寄宿学校ヘールシャムの記憶と郷愁を介することで，「普通の人々」の一生を極端に凝縮したものに普遍化される。

だが，考えてみよう。子ども時代はそんなに無垢で無邪気だっただろうか。子どもは子どもなりにさまざまな苦悩を抱えているはずだ。そうでなければ，これほど簡単に子どもたちが自らいのちを断つはずがない。今や多くの子どもたちが子どもながらにままならない人生を生きている。そうして大人になって人生のままならなさをさらに思い知らされているであろう「わたしたち」は，あの子ども時代を，子どもなりにさまざまな苦悩を抱えていたはずの子ども時代を，「何にでもなれる」という希望に溢れた無垢な時代として再編成し，想起するのである。

テレビドラマ「流れ星」に転じてみよう。借金返済の代わりに臓器提供目的の偽装結婚を契約した主人公梨紗は，契約解消を申し出る健吾

に「臓器を売って何が悪い？　風俗で身体を売るのと変わらないよ」と嘯く。そう語る梨紗はろくでなしの兄ともども崩壊家庭を生き延びてきた格差社会の申し子である。「流れ星」のやりきれなさは，梨紗が無償の臓器提供へと心情を変化させる理由が，兄母から愛されて無条件で生を望まれる妹マリアに自らを投影したことによる。梨紗は必ずしも健吾の妻になりたかったのではなく，むしろ岡田家の娘になりたかったのだ。格差構造で搾取されるのは身体だけではない。幸福な家庭への憧憬も，「普通の人生」への渇望も利用され搾取される。移植ツーリズムならずとも国内の格差をもとに臓器売買はありうるのである。ドラマでは「偽装の愛」が「真実の愛」に転じて梨紗はハリウッド映画よろしく上昇婚でハッピーエンドを迎えるが，少なくとも移植ツーリズム下において経済格差から生体ドナーとなった人々は提供後に健康を損ないむしろ格差を拡大させている。「流れ星」は，生命の南北問題が日本国内にも存在しうることを，図らずも示したのである。

だから，出口なしの残酷な運命を静かな諦念とともに引き受けているのは「コピー」だけではない。かれらの過酷な生に，問われるはずのない自己責任を問われながら黙々と働き，請負・派遣としてその労働力を使い捨てられていく現在の若者たちの姿が重なる。だから，あれはSFじみたパラレルワールドなどではなく，すでに「いま」「ここ」にある現在の日本社会の姿でもある。

加藤典洋は，ヘールシャムでの実験をめぐるミス・エミリー（人間）とキャシー（コピー）との対話について，「人間」を「欧米人」と置き換えるだけで，ここでの話はそのまま西欧社会の非西欧社会に対する文化的圧迫の問題になりかわるとしたうえで，弱者の抵抗を何にも依拠させないイシグロの戦略に，ポストコロニアリズムの戦闘性のより先鋭的な別の形を見いだす。加藤は，日本人に向けたイシグロのふたつのインタビューから，『わたしを離さないで』の最大の現実の架空性は「起こらなかったかったこと，すなわち，原爆は開発されなかった。その代わりに，臓器提供用のクローンたちの製造が開発され，その結果としてキャシーたちが存在していることにある」とし，彼／彼女らを「落とされなかった原爆の犠牲者たち」と見立てたうえで，次のように述べる。

> キャシーは，よく考えられない。トミーも，ルースも，うまく考えられない。短命を運命づけられた彼らは，子供を作ることができないだけでなく，――最後の会見でのミス・エミリーの言葉が示唆するように――健常者と完全に同等というほどの能力も持たされていないかもしれない。しかし，読む者は，より弱く，偽物の生を生きる疑似人間のほうが，本物の人間よりもディーセントで，人間的ですらある，という不思議な読後感をここから受け取る。「人間」であることは，必ずしも「人間的」であるための，必要条件ではないようなのだ。そこで虐げられた者は，第三世界性にもプロレタリアート性にも自分の悲惨さの理由を求めることができない。彼らはどこにもアイデンティファイできず，また，しないことで，誰よりも，遠くまで行き，これまでになく多くを深く経験する。
>
> （加藤，2011：163）

コピーたちは健常者と完全に同等というほどの能力も持たされていないかもしれないという加藤の指摘は，映画「わたしを離さないで」でアンドリュー・ガーフィールド（トミー）やキーラ・ナイトレイ（ルース）が演じたぎこちな

さやある種の鈍さを合点させるものである。確かになにかが足りない――Newsweek日本版の映画評でルイーザ・トーマスは「映画の中の彼らは，人間にしては，ちょっと魂が足りない」と酷評している。だが，加藤のこの見立てでその演出の理由が氷解する。

「「人間」であることは，必ずしも「人間的」であるための，必要条件ではないようなのだ」という加藤の指摘を生命倫理学ではよく知られるパーソン論に照らしてみればよい。生命倫理学は，人の生命を生物学的生命と人格的生命にわけ，理性的で自己意識のある存在のみを人格的生命を持つ「人間」とし，そうでない存在を生物学的生命しかもたない「ヒト」としてその生存権をみとめないことの理由づけとしてきた。つまり，「人間」の範囲を限定することで，重度障害胎児の中絶や重度障害新生児，遷延性意識障害者，脳死者の生命中断を正当化してきたのである。それは一見説得力のある合理的な論理であるが，その合理性のゆえに誰もが十全に納得できるわけではない。

映画ではミス・エミリーとキャシー，トミーとの会話はごくわずかだが，原作のミス・エミリーはより饒舌である。ミス・エミリーのつまるところ「あなたたちにはよくしてあげたではないか」という理屈は，コピーと「人間」の間に横たわるけっして越境されることのない非対称な関係を物語っている。だが，コピーたちが自らの残酷な運命を諦念とともに受容していくことが，むしろ「人間」の欲望のグロテスクさを際立たせるのである。

加藤はまた，物語の語り手キャシーによって聞き手（読み手）が「コピー」に，しかも，ヘールシャム以外の施設で育った「コピーたち」に，慎重に限定されていることを指摘する（加藤，2011：163，165）。それゆえ，映画でのみ語られる，原作にはないキャシーの最後の言葉，「私たちと私たちが救った人との間に何の違いが？　皆終了する。生（life）を理解することなく命は尽きるのだ」という〈自問〉の言葉によって，「わたし・たち」は多層的に試されることになる。この特異な設定の静謐で残酷な物語を，誰のどの立場で読み取るかを。

6．筋書きを超える言葉

逆に，映画には描かれなかった原作の言葉が，世界の別の姿を浮きあがらせることもある。

映画「ブタがいた教室」でも黒田恭史の実践記録でも，子どもたちは「食べるために飼い始めたんだから食べることで責任を果たそう」と話し合ったはずなのに，最後は子どもたちが食肉センターに送られるＰちゃんを校庭で見送って終わる。移送用のトラックに誘導するために前日からエサ断ちして腹を空かせたＰちゃんに，一人づつ別れのトマトが手ずから与えられるシーンは，映画でも実践記録でも涙を誘わずにはおかない。だが，当初の目的であった屠畜も解体の現場にも子どもたちは立ち会わなかった。食用肉として育ちすぎたＰちゃんのその後は不問に付されたままである。それはそれでひどく中途半端で無責任で偽善的な最後である。黒田の実践への批判はたいていはここに集中する[20]。

他方，黒田は著書で次のように語る。

> 豚丸ごと一頭食べる鳥山実践に憧れ，それを目指してきた私は，３年間を経てまた別の道を歩み始めていた。
>
> 命の問題を考えるということは，答えが一通り

でない問題を考えることである。それも，「みんないろんな意見があっていいね」といった，軽やかさだけでは語りきれない事柄を考えることである。「豚は教材ですか？」という，突き詰められた命の問題を考えることでもある。

（黒田，2003：167）

そして，子どもたちの発する言葉を「冷静に考えれば私の想像することのできる範疇に入るものがほとんどで［……］子どもたちのすごいところは，教師の期待する言葉や文章を瞬時に読みとり，それを適切な場面で表現することができるという能力であった。だから，子どもの発する言葉は，すでに私の心の中のどこかに存在していた」と評した後で，以下のように続ける。

ただ，３年間の中で，ほんの何回かだけ，こちらが腰を抜かすほどの言葉を発した場面があったと思っている。それは，討論での水谷元則の言葉であった。

水出奈津実「結果を先延ばしするだけやと思う。」

水谷元則「先に延ばせたらええねん。ちょっとでも命が延びてくれたらそれでええねん。」

［……］

このような言葉は，私の心の中を端から端まで探してみても決して出たことのないものであった。正直，頭の中が真っ白になった。

（黒田，2003：173）

Ｐちゃんの実践でほとんど触れられることのない「事実」は，Ｐちゃんが学校にやってきた前々日，前年に筋萎縮性側索硬化症（ALS）と診断されて自宅療養していた父親が呼吸困難に陥り，Ｐちゃん到着の夜に緊急入院先で最期をむかえていることである。そのときの思いを黒田は「死に直面したとき，何をどう考えてよいのかわからず，自分の中の羅針盤がぐるぐる回転するばかりであった。［……］死と真っ正面から向き合ってみたい，それを教育で行うことに次第に私は意味を感じるようになっていた」（黒田，2003：21）と語る。

ALSの進行には個人差があるから黒田の記述だけで軽々なことはいえない。だが，発症から１年足らずで死に至った状況，告知はしていなかったことなどを見る限り，時期をみて気管切開し人工呼吸器を装着して生存するという選択を黒田家は取らなかったようである。そのような選択肢が存在することさえ知らなかった／知らされていなかったかもしれない。だからこそ，「先に延ばせたらええねん。ちょっとでも命が延びてくれたらそれでええねん」という水谷の言葉が，黒田には，「心の中を端から端まで探してみても決して出たことのないもの」だったのではないか[21]。

先述の「殺すんじゃなくてＰちゃんも私たちと一緒に卒業するって考えよう」という言葉は映画「ブタがいた教室」ではクラス討論のなかで子どもの口から発せられるが，実際は保護者も交えたクラス討論での母親の言葉である。看取りの作法を心得た大人の知恵である。だが，母親の発した言葉の重みに耐えきれず涙が溢れて自らの言葉を発し得なかった飯村真由子は，最後には「３年生に引き継ぐ」派に転ずる。大人の知恵に子どもは抵抗しきったのだともいえる。

いや，実践の終了後間もなく放映されたテレビドキュメンタリーには，話し合いの場で語られた子どもたち自身の「野辺送りの言葉」も記録されている。「自分たちが飼い始めたんだからけじめをつけて食肉センターに送ろう。殺して墓造ってうめたったらいい」「お墓を造ってお彼岸におまいりすればいい」――それは同時に，自分たちで飼い始めたＰちゃんの後始末を

自分たちで引き受けて責任を果たそうとするけなげな言葉である。けなげであると同時に，これら，1992年の12歳の放つ言葉に，限られた医療資源を憂えて高齢者・難病者に末期の死に支度を促す昨今の論調と同根の「よき死」の作法が垣間見えることは，確認されるべきことでもある。

だが，これに抗う「３年生に引き継ぐ」派が語る次の言葉は，「よき死」の作法の流通が内包する権力作用を稚拙な言葉ながら見事に曝いてみせる。

「それ，どうせいつか死ぬんだから今殺せばいいって聞こえる」

「(「墓を造ればいい」に対して）それこそ逃げてるんじゃないの，問題を解決したら生き延びれるじゃない」「問題を解いていこうとしないで処分したらいいという方向に持って行ってる」

「今の時点で墓とか出さないで。自分がＰちゃんと考えて，自分たちの都合で死ねといわれたら死ねますか」

（フジテレビジョン・フィールドライフ制作）

「食肉センターに送る」派のリーダー格で最も論理的であった近藤真由は，卒業後，２度にわたって黒田に手紙を送っている。「親や大人は「責任」がかぶってくるからそんな問題とても無理と考える。それは正しいと思うけれど，なにかから逃げている。責任なのか問題なのかＰちゃんなのかは分からない。たぶん私もこの３つからさじを投げていた」と。

こういう近藤の言葉を，黒田は「彼女もまた私がそうであったように，全てのことを計算づくで解決しようとしてきた。そして，そのことは，最後の最後まで正しかったし，彼女の生き方であった。[……] しかし，彼女もまた本当の最後のところで，もう一つの道が見えてしまったのだ」と評する。

黒田の実践記録を読むと，たしかに一生懸命ではあるがいかにもいきあたりばったりで，その点は非難を免れまい。Ｐちゃんの実践を厳しく評すれば，「筋書きはあっても見通しのない，中途半端な授業」であったことは否めない。だが，黒田を圧倒させた上記の子どもたちの言葉は，まさに「筋書きにない言葉」，「筋書きを超えた言葉」だった。ここでは，教える者と教えられる者の非対称な関係が見事に転覆されている。精緻に計算された授業を越えるダイナミズムがそこには存在するのであり，それこそが規律・訓練という〈訓育〉の暴力性を超克する教育の希望とでもいえるものではないか。

結びに代えて

生命倫理学は，生・老・病・死をめぐる袋小路のような問いに，「質の低い生命」を生まれさせないようにすること，死に逝かせることを正当化する論理を編み出すことで「問題の解決」を図ろうとしてきた。パーソン論や自己決定の原理は，その代表とでもいうべきものである。他方，生まれる前に送った生命，病み老い衰えた生命を看取った哀しみを癒し納得する術を編み出して両輪のもう片側を担っているのが死生学であろう。

だが，そのような合理化された予定調和（の思想と教育）の行き着く先が何であるかは，もういちど顧みられてよい。先鋭的なパーソン論者であるピーター・シンガーが，人間中心主義を種差別主義だと批判して動物の解放を主張するかたわら，ダウン症児や重度障害新生児の殺害を擁護したことはよく知られているが，シンガーの人間中心主義批判は，実のところ，脳中

心主義という人間中心主義であるにすぎないともいえる。R・D・トゥルオグはラザロ徴候や長期脳死児の顕在化ゆえに，脳死を死とする基準を棄てて従来の身体死を死と認めた上で，生者からの臓器摘出がもたらす死を「正当化された殺人」として法的に認めようと主張した（だから，映画でトミーの最期がさながら死刑執行のように描かれたのは，生命倫理学の観点から見てあながち理由のないことでもない）。そのアメリカでは，まだ脳死状態にもなっていない患者を，人工的に心停止に至らしめ，即座に臓器を取り出す人工的心停止後移植（人工的に引き起こされた心臓死後の臓器提供）が徐々に広がっているという。そんなアメリカの状況を森岡正博は移植「先進米国にみる荒涼」と伝えるが（森岡，2009），それは，キャシーが作品の最後でたたずむノーフォークの荒涼たる風景にも重なる。

キャシーの言葉がヘールシャム以外で育成された「コピー」たちに向けて語られてきたのだとすれば，その聞き手である我々は，そこに，自ら不当で不条理な運命を声高に告発することなく，静謐に受容していくキャシーたちの諦観が炙り出した「人間」の非人間性を，受けとめずにはいられまい。

今後，学校で語られるであろう「臓器移植ををめぐる物語」は，世間で流通するエンタテイメントの物語とあいまって，ヘールシャムのように人間の家畜化を訓育し人体の部品化・物象化を促進する「移植医療に関する啓発」の物語に転じていくことを十二分に予感させる。臓器移植法の改定前後から，臓器移植について考えさせる子ども向けの記事をしばしば目にするようになった。紙面の限られた記事に詰め込まれた情報はラザロ徴候も長期脳死児の存在もそぎ落とされてパッケージ化された知識にほかならず，最後は一様に「（突然の決断をせまられた家族が困らぬよう）日頃から家族と一緒に考えておこう」とまとめられている。多教科を縦横無尽に構造化した鳥山敏子の実践は「ニワトリを殺して食べる」「豚をまるごと一頭解体する」特異な行為のみが切り取られて一人歩きしただけでなく，いまや屠畜をビデオ視聴ですませて衝撃度を回避し（手間を省い）たパッケージ体験に変容した。

だが，このように極度に無駄を省いてパッケージ化された体験や感動や思考（それはスーパーに並べられた肉や魚の切り身のようなものである！）の行き着く先がキャシーのたたずむ荒涼たる風景だとしたら，そうではない別の道，たとえば，「ちょっと足りない」魂に磨きをかけて見苦しくない，みっともなくないディーセントな最期を迎え見送ることに腐心するのではなく，むしろ「魂がちょっと足りない」ことに意味を見いだす道をあらためて企ててもよいはずだ。それは，黒田の教え子たちが「筋書きにない言葉」で教えられる者と教える者との関係を転覆し「もう一つの道」を見るに至ったように，生命倫理学や死生学の別の道行きを探り出すことにほかならない。

そこに期待してならない道理はない。

注

1）　その後まもなく，この少年は鉄道自殺によるものであったとの報道が週刊誌に掲載された（『週刊文春』2011年４月28日号）。現在のところ，他誌に続報はない。事実であるか否かを含めて，提供のプロセスは適正に検証される必要があるだろう。

2）　子どもの意思表明権については森岡正博（2000），日本小児科学会小児脳死臓器移植検討

委員会（2003）を参照のこと。いずれも「死の教育」の重要性に言及しているが，その内容については精査が必要である。「生命倫理教育」「死の教育」が持つ語りの構造については稿を改めるが，既刊のものとして大谷（2004，2005a，2005b，2005c）を参照されたい。

3） 映画の公開は2008年８月２日。当初はわずか７館でスタートしたが公開前から話題を呼び，上映館は110館を超えるに至った。人身売買，児童買春や児童ポルノ，生きている子どもからの心臓密売など「過激な」描写，タイ国内での撮影許可の有無などをめぐってバンコク国際映画祭で上映中止になったこと，内容が実話であるかのようなPRがなされたことなど，話題には事欠かない展開となるなかで，日本ユニセフ協会，コードプロジェクト推進協議会は児童買春防止の立場から本作品を推薦した。監督は阪本順造，主演は江口洋介（南部），宮崎あおい（音羽）ほか。

4） 「ドナー・ベビー（donor baby）」は，難治性疾患（血液疾患が多い）に罹っている兄姉の治療目的で，移植（臍帯血移植と骨髄移植）用ドナーとして次子を出産するために，体外受精によって得られた複数の胚の４ないし８細胞期の段階で１ないし２細胞を採取して遺伝学的検査を施行し，組織（HLA：ヒト白血球抗原）適合性の高いものを選んで子宮に移植し，妊娠するという手法で，しばしば「救いの弟妹（saviour sibling）」あるいは「スペア部品（spare parts）」という表現で言及される（霜田 2009：17）という。

5） フジテレビ系列で，2010年10月18日から12月20日に放映されたテレビドラマ。主演は竹野内豊（健吾），上戸彩（梨紗）。脚本は2008年度の第21回ヤングシナリオ大賞佳作を受賞した新人臼田素子の『クラゲマリッジ』をもとに本人が手がけた。公式サイトはhttp://www.fujitv.co.jp/nagareboshi/index.html。

6） 原題は***Never Let Me Go.*** 原作出版の翌2006年には土屋政雄による邦訳が出版された。映画はイシグロの要請でアレックス・ガーランドが脚本を担当し，テッサ・ロスを加えた３人で制作された。監督はマーク・ロマネク，主演は，キャリー・マリガン（キャシー），アンドリュー・ガーフィールド（トミー），キーラ・ナイトレイ（ルース）。ヘールシャムの校長ミス・エミリーをシャーロット・ランプリングが好演している。

7） アメリカの臓器調達移植ネットワークのWebサイト（http://optn.transplant.hrsa.gov/）では，移植待機者数やドナーについて，1988年から最新にいたるさまざまなデータが公表されている。

8） 移植された臓器を「異物」として排除しようとする拒絶反応を抑えるため，レシピエントは移植手術の「成功」後も，免疫抑制剤を服用し続ける。使用量の不足は拒絶反応を招き，多すぎれば感染症・悪性腫瘍・出血などを引き起こすことになる（村岡，1992：40-41）。一度移植を受けた患者はその後再移植を余儀なくされるケースも稀なわけではない。移植医療の成績をより高く（95％以上に）維持することができないのは，単に免疫抑制の不十分さによる拒絶反応だけでなく，他者の身体に入れられた移植片のうけるストレス（元来の物理的生理学的な意味での歪み）による臓器部品の消耗もあると考えられる（村岡 2011）。

9） 実際，臓器移植ネットワークは上映直前の７月30日に「お知らせ」でこの映画を「決して遠くない外国の出来事です。皆さんも，劇場に足を運んで自分なりに考えるきっかけにしてください」と呼びかけ，上映映画館に臓器提供意思表示カードを設置した（臓器移植ネットワーク 2008）。臓器移植法改定論議に当たって推進派移植医としてたびたびメディアに登場した大阪大学の福嶌教偉は制作時から深く関わり，父親のセリフが福嶌の助言の結果であることを明らかにしている（朝山，2008）。

10） 「出口なし」の設定は，臓器目的のクローン人間を描いたSF近未来という類似の設定でありながらクローンとオリジナルの立場を転覆させてカタルシスが得られる『輝夜姫』や「アイランド」とは決定的に異なる。『輝夜姫』は1993年から2005年まで『LaLa』（白泉社）で連

載された清水玲子の漫画作品。「アイランド」（原題：The Island）は，2005年に公開されたアメリカのSF映画で制作・監督，マイケル・ベイ，主演，ユアン・マクレガー。

11）　本主題については，一宮茂子（2010），武藤香織（2003）などを参照のこと。

12）　2009年の臓器移植法改定の論議においては長期脳死児の存在がクローズアップされた。同年７月７日の参議院厚生労働委員会に参考人として招致された森岡正博は，旧厚生省“小児における脳死判定基準に関する研究班”の報告書「わが国における小児脳死診断の調査」を引用して日本における長期脳死児の存在を証言しマスコミがこれを広く伝えることを要望した。他方，同日午後の審議において，改定臓器移植法の法案提出者である富岡勉議員は日本の長期脳死児はすべて「臨床的脳死であって法的脳死診断を受けていない」と断言した。少なくとも朝日・毎日・読売・日経の四紙においては森岡の証言についても富岡の断言との齟齬も報道しなかった。2009年の改定臓器移植法をめぐる国会論議とメディア報道については，伊藤未弥（2010）を参照のこと。

13）　村井淳志は子どもたちのその後の聞き取り調査を行い，その実践の隠れた意図を推測するところまで掘り下げているが，総合的に鳥山の実践をみることなく，「ニワトリを殺して食べる」点にのみ焦点化し，自らも同様のワークショップを行うに至った（村井，2002）。井門正美は鳥山の実践に影響されて計画され，保護者の反対で騒ぎとなって挫折した秋田県雄物川町立小学校の総合学習「きらり☆いのち」を批判している（井門，2003）。こういった実践に「屠畜体験学習」というタームが与えられて一括りにされること自体，すでに鳥山実践のダイナミズムから遠くかけ離れたものとなっているといえよう。

14）　監督・前田哲，脚本・小林弘利。制作・「ブタがいた教室」制作委員会。黒田の実践自体は，偶然知り合った番組制作ディレクター西谷清治によってフィルムに収められ，1993年７月12日にフジテレビ系情報番組「今夜は好奇心」で「豚のＰちゃんと32人の小学生」として放送され賛否両論を巻き起こした。同ドキュメンタリーはフジテレビジョンとフィールドライフの制作で開隆堂よりDVD化されている。

15）　山崎吾郎は臓器移植の贈与論をバイオエコノミー論として展開している（山崎，2009，2011）。

16）　代表的なところではジャック・アタリのカニバリズム論（Attali, 1979＝1984）。波平（1988）も臓器移植を儀礼的カニバリズムの文脈に置いて論じている。

17）　立花は「生命世界の一員として，死ぬときは食物連鎖の輪の中に入って，ほかのメンバーの栄養になるのが一番正しい生命体のあり方だ」という持論のもと，「最も現代的な生命連鎖の輪の中に入る道として，移植のドナーになることを決めた」（朝日新聞1999．４．28）。詳細は立花（1999）を参照のこと。

18）　1999年から2004年まで過去５年分の英米学術誌における臓器移植に関する論文をサーベイした児玉聡は，臓器提供は基本的に義務を超えた行為（supererogation）であり，ドナーの自律（自発性）と利他心が重視されるものであるとするものが主流ではあるが，「持たざる者」（レシピエント）への援助義務を具体化した制度として，推定同意制や義務的選択，徴用型制度を提唱する論のあることを紹介している（児玉，2006）。

19）　Otani（2010）では，姥捨て伝説や切腹の死の作法を用いて「よき死」をパッケージした日本の「安楽死・尊厳死」論を論じた。

20）　ドキュメンタリー放映当時を後の黒田は「ゴールが最初どこにあったのかということと，そのゴールに向けてどのように黒田という教師は働き掛け，そして子どもたちをそのゴールにきちっと導くことができたのか――が多くの方に指摘され，一番大きな問い掛けとして突きつけられた」と語っている（黒田，2008：４）。

21）　後の黒田は，この実践を行う上で父親がALSで不治の床に伏していたことが大きな原動力となったとふりかえっている（黒田，2010：110）。だが，父親の病と死についての記述はそこまでにとどまり，Ｐちゃんの実践をとおして

父の闘病と看取りをどう考えたかについては一切述べられていない。人間とは何か，死とは何かという問題に幼いころから関心があったという黒田だが，Ｐちゃんの処遇をめぐって子どもたちから放たれた問いは，少なくとも黒田自身の記述をみるかぎりでは，あくまでＰちゃんとその処遇という「動物」の範疇にとどまっているようにもみえる。それが黒田の自制によるものか否かは入手した限りの文献では判断できない。

引用文献

2011,「初の子供脳死移植「少年」は事故死でなく自殺だった！？」『週刊文春』2011年４月28日号，34-35.

朝山実，2008,「「闇の子供たち」が映す臓器移植の課題――大阪大学医学部付属病院移植医療部福嶌教偉さん【後編】」，『日経ビジネスオンライン』，http://business.nikkeibp.co.jp/article/life/20080805/167273/，（2011．５．３取得）

Attali, Jacques, 1979, ***L'ordre cannibale: vie et mort de la médecine***, B. Grasset,（＝1984, 金塚貞文訳，『カニバリスムの秩序――生とは何か／死とは何か』，みすず書房）.

檜垣達哉編著，2011,『生権力論の現在――フーコーから現代を読む』，勁草書房.

井門正美，2003,「屠畜体験学習の批判的検討（１）――秋田県雄物川町立小学校における総合学習「きらり☆いのち」を事例として」，『上越社会研究』，18：11-20.

Ishiguro, Kazuo, 2005, ***Never Let Me Go***, Faber and Faber&A.A. Knopf,（＝2006，土屋政雄訳，『わたしを離さないで』，早川書房）.

カズオ・イシグロ，2006,「インタビュー：『わたしを離さないで』，そして村上春樹のこと」，『文學界』，60（８）［2006-８］：131-146.

一宮茂子，2010,「生体肝移植ドナーの負担と責任をめぐって――親族・家族間におけるドナー決定プロセスのインタヴュー分析から」『Core Ethics』６：13-23。

伊藤未弥，2011,「2009年臓器移植法改定を巡る論議――子どもの脳死臓器移植を手掛かりに」，（2010年度立命館大学大学院社会学研究科修士論文）.

岩波祐子，2009,「臓器移植の現状と今後の課題（１）――法改正の背景と国際動向」，『立法と調査』，298：36-52.

春日直樹編，2008,『人類学で世界をみる――医療・生活・政治・経済』，ミネルヴァ書房.

加藤典洋，2011,「ヘールシャム・モナムール――カズオ・イシグロ『わたしを離さないで』を暗がりで読む」，『群像』，66（５）［2011-５］：155-165.

川本隆史編，2005,『ケアの社会倫理学――医療・看護・介護・教育をつなぐ』，有斐閣.

鬼頭秀一，1996,『自然保護を問いなおす――環境倫理とネットワーク』，筑摩書房.

児玉聡，2006,「臓器提供制度のあり方に関する過去５年間の英米学術誌の動向」，http://plaza.umin.ac.jp/~kodama/bioethics/organ_procurement_survey.pdf（2011．５．８閲覧）

黒田恭史，2003,『豚のＰちゃんと32人の小学生――命の授業900日』，ミネルヴァ書房.

――――，2008,「潮流　佛教大学准教授黒田恭史氏に聞く（上）実践を問い続け，重み増す「命の授業」」，『週刊教育資料』，1047：３-５.

――――，2010,「映画『豚がいた教室』を巡って」，『学士會会報』，2010（２）881：109-114.

松原洋子・小泉義之編，2005,『生命の臨界――争点としての生命』，人文書院.

森岡正博，1994,『生命観を問いなおす――エコロジーから脳死まで』，筑摩書房.

――――，2000,「子どもにもドナーカードによるイエス，ノーの意思表示の道を」，『論座』，59［2000-３］：200-209.

――――，2009,「臓器移植法Ａ案可決　先進米国にみる荒涼」（朝日新聞2009年６月27日朝刊）

村井淳志，2001,『「いのち」を食べる私たち――ニワトリを殺して食べる授業――「死」からの隔離を解く』，教育史料出版会.

村岡潔，1992,「免疫抑制剤」，「医療人類学研究会編，『文化現象としての医療』，メディカ出版.

――――，2011,「いわゆる「脳死・臓器移植」を超えて（２）――その医療思想と代替医療をめぐ

って」，『佛教大学社会学部論集』，53，印刷中.
武藤香織，2003，「「家族愛」の名のもとに――生体肝移植と家族」，『家族社会学研究』，14（2）：128-138.
波平恵美子，1988，『脳死・臓器移植・がん告知――死と医療の人類学』，福武書店.
日本小児科学会小児脳死臓器移植検討委員会，2003，「小児脳死臓器移植はどうあるべきか」，『日本小児科学会雑誌』，107（6）：954-958.
日本臓器移植ネットワーク，2008，「お知らせ：映画「闇の子供たち」の上映映画館で意思表示カードを設置！」（2008年07月30日）http://www.jotnw.or.jp/news/2008/detail17.html（2011．5．3閲覧）.
織田竜也・深田淳太郎編著，2009，『経済からの出発』，春風社.
大谷いづみ，2004，「生と死の教育」『現代思想（特集：教育の危機）』：32（4）［2004-4］：142-157.
――――，2005a，「「いのちの教育」に隠されてしまうこと――「尊厳死」言説をめぐって」，松原・小泉編，［2005：91-127］（初出は2003，『現代思想』31（13）［2003-11］：180-197）.
――――，2005b，「「問い」を育む――「生と死」の授業から」，松原・小泉編，［2005：128-155］.
――――，2005c，「生と死の語り方――「生と死の教育」を組み替えるために」川本編，［2005：333-362］.
Otani Izumi, 2010, "'Good Manner of Dying' as a Normative Concept: 'Autocide,' 'Granny Dumping' and Discussions on Euthanasia / Death with Dignity in Japan," ***International Journal of Japanese Sociology*** Vol.19(1): 49-63.
霜田求，2009，「「救いの弟妹」か「スペア部品」か――「ドナー・ベビー」の倫理学的考察」，『医療・生命と倫理・社会』，8：17-27.
立花隆，1999，「ぼく〔立花隆〕はなぜドナーカードに署名したか」，『中央公論』，114（7）［1999-7］：136-151.
ルイーザ・トーマス，2011，「原作の深みを欠く魂のない寓話劇　話題作『わたしを離さないで』に足りないもの」，『Newsweek 日本版』，26（14）［2011-4-6］：70.
鳥山敏子，1985，『いのちに触れる――生と性と死の授業』，太郎次郎社.
――――，1987，『ブタまるごと一頭食べる』，フレーベル館.
山崎吾郎，2008，「脳死――科学知識の理解と実践」，春日編，［2008：39-57］
――――，2009，「からだを提供する／売る――臓器移植の経済」，織田・深田編著，［2009：168-192］.
――――，2011，「臓器移植の生経済（バイオエコノミー）――治療から数の調整へ」，檜垣編著，［2011：15-46］.
梁石日，2004，『闇の子供たち』，幻冬舎（初出は解放出版社刊．2002）.

Inochi no Kyoiku for the Apparatus of 'Discipline' on Organ Donation?: The Analysis of Kazuo Ishiguro's *Never Let Me Go* and the 'Failure' of a Certain Teaching Practice Concerning Pig Slaughter

OTANI Izumi *

Abstract: The revision of Organ Transplantation Law in 2009, which allows brain-dead people including children under age 15 to be an organ donor with the family's consent, creates an expectation for death education and bioethics education to children, while movies and TV dramas featuring organ transplantation attract people. The purpose of this paper is to clarify a hope of education that overcomes asymmetric relations in education, furthermore, a hope of reconstruction of bioethics, by the analysis of Kazuo Ishiguro's *Never Let Me Go* and the 'failure' of Kuroda Yasufumi's teaching practice concerning pig slaughter. The slogan of 'gift of life' for the enlightenment and promotion of brain death and organ transplantation is related to a certain *Inochi no Kyoiku* (Japanese death education), which teaches respect for life by the activities of slaughter, in the context of ecosystems and the food chain. Its packaged knowledge, experience and moving 'narrative' functions as the apparatus of 'discipline on organ donation' under the reflexivity of knowledge. On the other hand, Kazuo Ishiguro's novel *Never Let Me Go* and its screen version clarified that transplantation therapy divides human beings into two classes, one which should be kept alive, the other expected to endure dying and sacrifice, using as a fictional setting where clones created and raised only as organ donors, and their despair and resignation about being domesticated for donation, revealing the inhumanity of a social system that rationalizes human desire. Kuroda Yasufumi kept a pig with schoolchildren in their classroom for three years in preparation for slaughter, in order to teach the value of food and respect for life. In spite of his aim, the children named the pig P-chan, and wanted to keep him alive, not to be slaughtered, through heated discussions before leaving their primary school. Finally, this teaching practice ended with the teacher deciding to send P-chan to a meat processing plant. Thus, it seemed to be a 'failure,' but the children's unexpected words overwhelmed the teacher. The author concludes that we can find a hope of education that overcomes its violence, furthermore, a hope of reconstruction of bioethics through these two analyses.

Keywords: Inochi no Kyoiku, death education, bioethics education, the enlightenment of transplantation therapy, packaged knowledge, reflexivity of knowledge

＊Professor, Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University